平成 25 年 8 月 16 日 金曜日

奈良県感染症発生動向調査還元情報（週報）

奈良県感染症情報センター（奈良県保健研究センター内）Nara IDSC

今週の概要

- 第 32 週の感染症情報
- 流行感染症情報：手足口病
- 全数把握対象感染症発生状況（平成 25 年 7 月）
- 保健研究センター8 月だより～ヘルパンギーナの原因ウイルスについて～

第３２週の感染症情報 （8月５日(月)～8 月 11 日(日)）

奈良県および医療圏別発生状況 （奈良県上位５疾患）（５週前からの動向）

順位	疾　患	定点当り	奈良県	北部	中部	南部
1	手足口病	5.88	→	→	→	→～↑
2	感染性胃腸炎	1.79	→	→～↓	→	→～↑
2	ヘルパンギーナ	1.79	→	→	↑	↓
4	水痘	0.56	→	→～↑	↓	↑↑
5	Ａ群溶連菌咽頭炎	0.29	→～↓	↓	→	→

全県の動きと目立って異なる推移（定点当りの変化程度で実数ではない）を太い矢印で示す。

県北部地区概況　報告数（３１→３２週）は２２９→１９０例と推移した。上位５疾患は①手足口病（９６→１０８例）（定点あたり６．３５と警報基準５を超えている。）、②ヘルパンギーナ（５２→３３例）、③感染性胃腸炎（３２→２０例）、④水痘（１２→１３例）、⑤突発性発しん（７→７例）、眼科定点の報告は流行性角結膜炎が１例あった。基幹定点の報告はなかった。（有山 記）

県北部外来状況　８月に入り感染症はほとんどがなつかぜとなっている。手足口病が大流行しており最近は手足の発疹が大きく、多い方が多くなっている。ヘルパンギーナも少しずつ増えている。熱は１－２日程度３８度以上となる。保育園の３歳以下の子が大部分を占めている。（矢追 記）

県中部地区概況　報告数は 159 例で、前週報告の 152 例からやや増加。上位５疾患は、①手足口病、②感染性胃腸炎、③ヘルパンギーナ、④A 群溶連菌咽頭炎、⑤流行性耳下腺炎の順。手足口病の定点当たりの報告数は 5.64 と警報レベル継続中。手足口病の報告数（88→64→79 例）は、増減の繰り返し。ヘルパンギーナの報告数（24→19→25 例）も、増減の繰り返し。A 群溶連菌咽頭炎の報告数（7→2→7 例）と、再度増加。

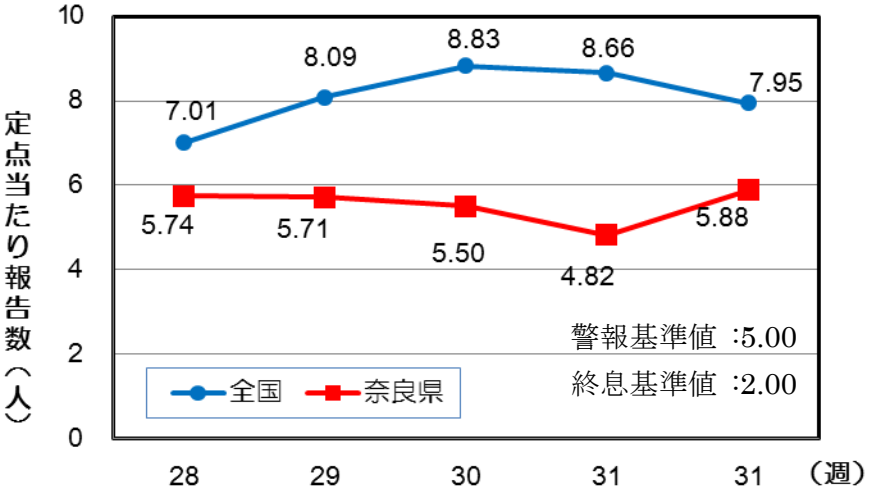
流行性耳下腺炎の報告数（4 例）は、横ばい。感染性胃腸炎の報告数（38 例）は、やや減少。桜井 HC および葛城 HC 両管内基幹定点と眼科定点からの報告は、すべてなかった。（村井 記）

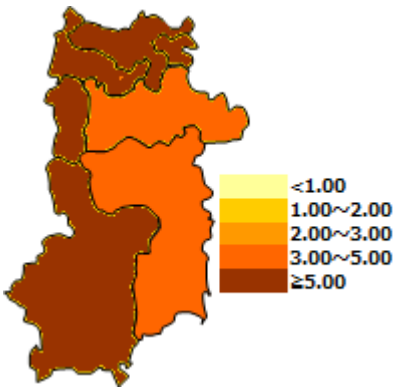
県南部地区概況　報告数（31→32 週）は 18→24 例と増加。報告のあった疾患は、①手足口病（4→13 例）、②感染性胃腸炎（3→3 例）、②水痘（1→3 例）、②ヘルパンギーナ（7→3 例）、⑤RS ウイルス感染症（0→1 例）、⑤突発性発疹（3→1 例）であった。（柳生 記）

県南部外来状況　手足口病、ヘルパンギーナの流行は続いている。手足口病では、発熱の翌日に発疹が出現している例がよく見られる。また、手足以外に陰部に多数の水疱がでる患者もいた。夏カゼに伴う胃腸炎も見られたが、いずれも軽症であった。（寺田 記）

≪流行感染症情報：手足口病≫

第 32 週の奈良県全体における定点あたり報告数は 5.88（報告数 200）となりました。郡山保健所が警報基準値（5.00）を超え、警報発令中です。また吉野保健所は、先週一旦警報終息値（2.00）を下回りましたが、今週は 4.00 と再度上昇しています。





保健所別定点当たり報告数

手足口病に関するQ＆A（厚生労働省）が更新されています。

http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou19/hfmd.html

予防対策についても記載があります（Q4）。

【全数把握対象感染症発生状況（平成２５年７月）】

平成２５年７月に奈良県内で診断された全数把握対象感染症は、以下のとおりです。

７月報告患者数（平成２５年８月 16 日現在）

類型	疾患名＼保健所名	奈良市	郡山	桜井	葛城	内吉野	吉野	計
２類	結　核	９	５	９	11	０	１	35
３類	腸管出血性大腸菌感染症	１	０	０	１	０	０	２
５類	アメーバ赤痢	０	１	０	０	０	０	１
５類	クロイツフェルト・ヤコブ病	２	１	０	０	０	０	３
５類	風しん	４	６	２	５	０	０	17

感染症情報センターホームページ
http://www.pref.nara.jp/27874.htm

【保健研究センター ８月だより】

～ヘルパンギーナの原因ウイルスについて～

現在、本県では手足口病の患者が警報レベルに達していますが、手足口病と同じエンテロウイルスが原因となる、ヘルパンギーナの患者数も増加してきました。
今月のセンターだよりでは、今夏のヘルパンギーナの原因ウイルスについてお知らせします。

ヘルパンギーナの原因ウイルスの経年変化について

ヘルパンギーナの原因ウイルスは、コクサッキーA 群のウイルスで 2、3、4、5、6、10 型の血清型が多いとされています。流行する血清型は毎年異なりますが、なかでも 4 型がもっとも多いとされており、本県でも表 1 に示したとおり 1999 年、2002 年、2004 年には 4 型を多く検出しました。奈良県では手足口病患者から多く検出しているエンテロウイルス 71 型は、ヘルパンギーナ患者からはこれまで確認していません。

表1. 本県のヘルパンギーナ患者検体から検出したエンテロウイルス(1999-2013)

ウイルス	1999年	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年
CA 2	4		10							3				2	
CA 4	26			15	1	17		6		1				2	
CA 5				2					1					2	
CA 6	16		3		7		11			3			2		1
CA 8														2	3
CA 10			6		15		2		3		1				
CA 16				1						1					
CB 1		1				2									
CB 3		1												1	
CB 4	1		1		1										
CB 5			8			1				2					
E 13				2											
計	47	2	28	20	24	20	13	6	4	10	1	0	2	9	4

CA:コクサッキーウイルスA群　CB:コクサッキーウイルスB群　E:エコーウイルス

今夏のヘルパンギーナの状況について

現在までのところ、全国の患者報告数は例年より少ないですが、コクサッキーウイルス A 群 8 型が最も多く検出されています。
奈良県でもコクサッキーウイルス A 群 8 型を複数検出しており、同様の傾向にあると考えられます（表 2）。

表2. 今夏のヘルパンギーナ患者の遺伝子検査結果(8月16日現在)

検体採取日	年齢	エンテロウイルス遺伝子検査結果
7月1日	1歳1ヶ月	コクサッキーウイルスA群6型
7月5日	0歳5ヶ月	陰性
7月20日	1歳8ヶ月	コクサッキーウイルスA群8型
7月23日	0歳7ヶ月	コクサッキーウイルスA群8型
7月24日	1歳3ヶ月	陰性
8月1日	2歳11ヶ月	陰性
8月2日	1歳9ヶ月	コクサッキーウイルスA群8型

近年、搬入されるヘルパンギーナ患者検体の減少に伴い、主因となるウイルスがとらえにくくなっています。当センターではコクサッキーA 群のウイルスに感受性が高いとされている培養細胞に変更するなど、検出方法を改善中です。
病原体定点医療機関の先生方には、引き続き検体採取のご協力の程よろしくお願い申し上げます。

（ウイルス･疫学情報チーム　米田 記）